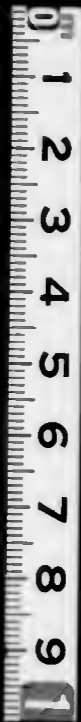


藩鑑

尾張殿



和書
三四六八二號

內閣文庫
和書
三四六八二號
二八冊
五九函一
二架

內閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (3)
函號	159 1

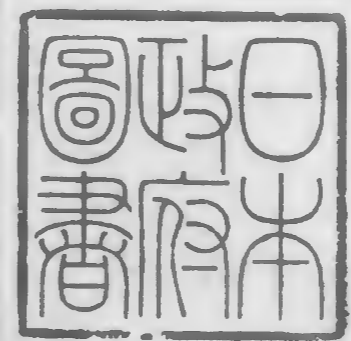
尾張殿

355

藩鑑卷之一目錄

尾張殿

權大納言源義直卿



藩鑑卷之一
尾張殿
源義直卿

藩鑑卷之一

尾張殿

源義直卿



權大納言源義直卿ハ

東照宮第九の侍子小して古童名を

又席を稱せられしや義知と義利

と名けし給ふ慶長八年三月四歳乃

古時甲斐國武井郡武井村同十一年八月
後曰位下右兵衛督又叙任一同十二年閏
四月尾張守を賜ふ同十六年三月後之位
宰相にすふ右中將を薨ぶと元和三年
七月權中納言に拜し寛永三年八月後
二位の權大納言になり慶安三年二月七
日逝し給ふ清享二年十一月

一 源敬公清初少清若ハ又帝を授く

家康公駿府より清康あり古教生より出河の時
又帝を授く清初亦當持を授く一と清初ありて
大なる古河あり一是より一切古亦當持を授
す或時古獨古鷹野より出させ後ハ終日の事
少く清康外あり古中間深津長助より肩
の古亦小松の法にて古休みある時小山下
半之帝古空腹を察し懐中より焼飯と出
して古亦當持より中より又帝を授く古

古時甲斐國政まいつくさ同十一年八月
後曰位下右兵衛督に叙任し同十二年閏
四月尾張守を賜ふ同十六年三月後之位
宰相にすみ右中將を兼ぶ元和三年
七月権中納言に昇し寛永三年八月後
二位の権大納言になり慶安二年五月七
日逝し終ふ清年五十一なり

一 源敬公清初少子清若公又帝右様とて

家康公駿府より江戸あり古教生より出陣の時
又帝右様清若當持を遣はしと清若ありて
大なる古河ありし是より一切古若當持を托
す或時古獨古鷹野より出させ終ひ終日の事
少く清若外あり古中間深津長助より肩よ
のせしは小松の法にて古休みある時小山下
半之帝古空腹を奈し懐中より焼飯と出
して召しよまはし中より又帝右様とて

大沖所擧亦當無用と仰おれを食すまうと
信ずる事之節中けるハ終日市鷹野の事あり
焼飯ハ苦しむす私もたへん長助も給させ
いんる百ふらまはと極くにくてめいふまは
此事後くまて市之節ひんちゅうおしすふ
家康公乃市子初ありと感しなうぬその
後も市女公市地極ありあはさま食籠を法
取く焼飯をつめて持せまうけるさあ後くも

市麻持は鷹野等よ市信の面く皆腰兵糧の
にて舟首を持事市割禁あり昔吐後編

一 慶長十九年大坂冬陣の節

東照宮

台徳公茶磨山の陣陣宮を巡見し給ひ一時
源教公も南詔公も小従ひ給ひあり時藤
堂初来り宮小入るせふと初見よ登りて城中
をうかひ給ひしは款も志きり小鉄炮を打

加けたまふ言虎別り甲をさうあけきりぬ
清光く側よとせ給ひしは少く神多し
変し給はさうけさし言虎も誠は名將の子弟
かりとて深く感し奉さう此とき清光く
十五 叙公実源
遂左城記

一 元和元年大坂夏陣

東照宮天皇与小玉り給ふ公及し南龍公後
詰たり公先陣を占給ひあふんと思召けるふ

成瀬軍人正成然るへはは中此時大坂乃
軍兵茶磨山に陣を置きり

東照宮是を清光して内後主馬重次を
清使として仰越されは速に來りて彼勢
を撃及し且此事を南龍公小も告及し公
河野孫兵衛を以て此事を南龍公へ通し公
小々急ぎ茶磨山へ越んとし強ひて山下
軍之所氏勝兵今軍勢兵糧を遣ひ給ふお

濟州追討なる一と申ける小公作は速小代すんを
款退く事も計りたかく或は年後速小代すんを
宣ひけしハ氏勝も然る一とて諸軍一同は兵
糧を腰小して馳けるまよ

東照宮もまた從從乃直使にあひたりされは
源池後ひくも、まよ茶磨山に馳付給はる
内小款既小敵を一公の清詞は遠はかりけり世時
法年十六 同

一 大坂復陣のとき生駒周懐利豊大道吉玄蕃
直重の諸將陣を結んで勅らす尾崎内蔵奴
宣ふ左田與平正徳諸軍を割して辭めけり
公是を正徳一と申りて勅らすもの其腫子
上にあり今正徳を見る小面上す一と眼ある如
く仰らまけり公軍中強授の時といふも少し
心を勅らす給はす能人の振舞を察し給ふと
是等少く推する一 尾藩敬公車蹟

一 大坂甚多陣の節并伴掃部頭後堂和泉守真
人六日小舟を碇きけりて七日小舟少く引下り
て有ける軍南小舟を始り正藤本も入札志
も一鉄炮の煙燻にて是罷きさうあふす然る不
掃部頭先年の勢何と志さうけ人あめきけるを
下知してす、午馬廻りを以て節時小舟廻り
譜代の節後を此所をんく親小も勝るありと
語りける和泉守先年も最志あるう志る一も

あく是もより近一けり是も守備一味方最
れと不幸少く減り希代の儀あり諸勢を
しくあめき最志すとも不幸か一時は敬公
古勢一万餘騎を引率一

東照宮の右儀より押廻一天皇古茶磨山一
古下知を以て押下り終らば彼諸勢の味方
最志す古勢色めき足輕を味方を敵と以て
鉄炮を放一けり使者番を以て下知一終らば

渡邊右衛門守總吉馬の前小末より一を
清見していつ小忠右衛門味方と見
ある程小末幣ひ取らるると仰けま忠
右衛門此言葉を承りて肝は踏一は返す
に及ばず不覚の感涙を流し其教公進まん
小忠とすと素出一強ハ清勢も進むるとい
得く崩る者一人もか一此下知の格を加賀の
武者奉行松平伯耆水野内通備守て清平

十六あるといし軍後小なと強ハさかんはかく
隙機度夏の古振舞を實小名將の清急をふ
其一強けの我く武何程の強いとすとも是
小比とまきや大將の武道よといて是小かある
あるへいすすと感一あつと
松井南水著書 舊徳編
古ま法話

一 元和法武目法定の何小法一門中一通り仰られ
思召も是あがハ仰とられもあり一時源敬敏十
六歳なり一り直小信とられ一ハ再立ハ一字清

度外素與免許の所小儒醫と云度外凡當世の
學生ハ道春始めハ法辨にして少ハ儒と云
中かこし法中法眼の類僧徒かハ陰陽師の
たくひふて醫陰とありてハいふとありしハ書改
シル
改正元年秘記
鳥有秘記

一 寛永三年

台徳公上洛世前祈幸あり市儀式ハ大抵秀
吉の張樂ハ祈幸小準と云り是歌の會あり

源教棟の市歌

我君と云ふいふる異行ハ名
義かぬまを子ハ啓

君臣云行録

一 源教棟詩歌も古好ありしハ今古語り
傳ふもすく

道すくハ清き流れのありしハ
人の心りのあやむもの哉

島丸光廣わへ濬削を乞せられしよ光廣わ
あやうきものとの七文字をにたり江の水と加筆
あまーしー

春興 於江府邸作

梅花紅綻惠風香草色江城日々昌酌

酒彈箏更無事已知恩顧在君王

林春齋曰此詩親筆被寄先考今傳在余手

彼是懷舊不覺淚之下也

中秋

去年旅館中秋天月色空濛雲霧連今夜

家郷歌舞地清光萬里一樽前 本朝一人一首
昔咄

一 寛永六年己巳

大猷院椽清不例清火切のうー尾州一申朱

なるといふや源教秋早追ふて西下向あり若根

まてと使生迎西下向よ及たすとの事あり一カ

別ち若根山少くは麻鶴ありて清改城あり

翌年五月の河津光中より六月の吉原
不測の事の上も吉原の事も吉原の事
はありし源紋抄其後ハ

公方採の河津審ふれハ吉原の事ハ又其方達
の事も吉原の事も吉原の事ハ又其方達
何とも閉口ありし此流ハ吉原の事ハ又其方達
ハ又其方達ハ又其方達ハ又其方達ハ又其方達
中條山城守及吉原の事ハ又其方達ハ又其方達

時小崇農院抄各々河津光中ハ又其方達ハ又其方達
ありし源紋抄其後ハ又其方達ハ又其方達

一 寛永七年

台徳公河津不測の事ハ尾張より吉原の事ハ又其方達
瀬隼人正虎河津不測の事ハ又其方達ハ又其方達
台徳公正虎を河津不測の事ハ又其方達ハ又其方達
尾張殿の事ハ又其方達ハ又其方達ハ又其方達
且酒魚をも河津不測の事ハ又其方達ハ又其方達

大炊政利勝沖例より尾張折出あり

君の古不例をこと此外古事思ふは古延氣も
入せられすけり一小治産ゆ一中とけれ

台徳公正虎より向ひ給ひ

我病氣全收せし尾張殿も安堵して歎氣

小治ふと給る一きり中遣一と作りける

公の公儀を教一後ふ事一大抵かぬ如一
敬公 實際

一 寛永九年公林道春のため小聖堂を上野道春 別

前小治達文宣王親曹子孟の像を安置し公

より先聖殿といふ額を清浄堂にたれり方

小花香をききり彩雲を施し一強一り是清尚

代學校の始を是時古年二十一 同上

一 講釋ふと申すはたれり何一つも清浄百世

られ經書ふと下小並せられす清浄ん屋して清

浄はたれり講釋ハ文意少くはり古紙にたき

れりきり古鼻紙を長くはりきり清浄のる

古入並托いさま—— 杉井水菟書

一 叙公或時清い奥へ入らせりし餉のほろろりあり有ける
内は道春法衣石圖まうて来りし——其法の用人
肥田の何業出向ているいふい奥へ入る餉をさめ
給ふ給ありといひ道春くいるい我等のほろ易き
事あるい又いそ来りありと云てゆりぬ其法い公表よ
出させ給い仕事をさす百して道春を来りしと
何とて奥い志せきりしとと信ふま——うは

肥田志うくのう——中——うの大小怒らせ給ひ
奥へ通して我出しは何時の吾教のわきを
えしやと信られしうの肥田に云業ありしと
赤面せしとありき 替徳編

一 辟庵と中は醫者の禅学者なり叙公清い前して
佛経記録の内のは清い中い何は法座に事程
圓融と中候を中い知行念一のうらのうは
よき云業のう——清い少し何れいし事程

因融の儀古言古庄外加やうの儀よく様字小古ん
も向せられしと存り或時古前くを以て深田
正室と儒佛の編を中合其節敬公ハ古誠を
古立拵はされし古誠治お海し古市起拵はれ
以の外古様増損し佛書の儀も後漢乃
明帝のとき古十二章強く中もの初く中
華へ渡りまよま彼徒の者梵語少くハ哲明
さる由中華の字を以て翻譯せしめれ

ふれハ皆く儒書小據て書中ハ由其詞小と
いてと道理ちくく傷小言しき拵の事もハ
しとも根本天理小ちうひ人の第一よしハハ
偏少てハよまをなちりてハ末い拵の理よし
き義あるとも皆偽教少てハ君をかみし
又をなみし別して祥家小まうてハ天理を
なみしハ得ハ毛段古用ハ花ハさるべき古ん少てハ
古庄おくハたとも儒語を利は小取用ハハ少く

思百古少花かきく候小は清前小として只今の
格多候を中候不唐よ思百外りして甚
清叱り花ざれまきして後くまて佛語の
清叱りハ花いされきりしてとあり
松井南水賞書
舊徳編

一 寛永十一年

大猷公古よ洛の若ぬ凡古ぬま小酒井雅樂院
た世を差盡れしとき古院少て西丸出火あり
故小雅樂院通塞なるも其後復経て古之家

柳まき井伴掃院院連孝小因て雅樂院清
敷先の古院言を伴ふられしは掃院院承りて
奥へ入りしう志あり有く出中けるも今殺雅
樂院の古院ハ

公方様清り為を思百されての古院小ハ雅
樂院の為を思百されての清院小ハ式と申ふ
けれハ紀州柳水戸柳小も連の古若もかり小
敷公古也あり然りす掃院院一分の料者少

中さくしと遠意の挨拶ふま着

公方様の思召なまは古かきけりぬいし
らまよりのたまひく其と仰られぬ出火を
不意ある候と誰とて計りかき事小
一旦も通塞仰付ふまは古尤も
過事よりて古叔光にされても事為又宜
きと存ふり少く小前のぬきの古舞ハ古きけ
なま候ふらとありし同掃放院紀州伏水戸

横小も古因念より式と加さねて伺ひける小
古挨拶速くしけまて敬公なら小尾張り
さやう小中を中ふれぬと仰る掃放院
其うを

大猷公中しけれ

大猷公清之家横は古對顔あり之公を古叔
光の古親ありしよりと雅樂院通塞と叔さ
れ多し其後掃放院成瀬年人正虎一清りしハ

此頃教公雅樂院在院之時は折子のす
さましき今も首を落さざらんを心入りて
大小公乃到正を禰しきりし時正年
之十五 教公実録
昔世

一 寛永十一年

大猷公江戸へ涉り歸城の後尾州源教公世
上の疑ひ少く名護屋の城は一宿を去
後を足是小思召し集勤ふきしきりし

信公は北より紀州の南龍公は集勤の路名護
屋へ涉りなされ源教公小是紀集勤ふきし
括り涉り矣ん仰せらる教公信公も小加やう小
上小は終ふきれてハ集勤して面白くも思召
されすいこの城ハ

東照宮より拜領なされし是啓者として使
遣されしは城を枕小は腹抱はるへし一他
らる南龍公さやう小はり我もいつ述はせよ

居申すべし此角道はり如く此の
申く我くも教是はるまゝのりて達て此
見して此種納なきは江戸へ此系勤なきは
あり此目見のとき

大猷公上言ふ此度系勤有るまゝのりてさ
ゆつ此出馬なきは尾州よをいて此達なきは
と思ふ言ふ此下向く此此度是ふ思ふ言ふ
のりて

義公遺事

一 大猷公いしるる若君は一方も此誕生なき時分
此煩なきは此大切の此種子少く世有る氣遣
ける此源教公尾州よをいてけるは此何もなく
早打少く江戸へ此下向なきは

大猷公此此なきは大法をやかり我徒よ此り
の事此言ふ可しす此の外此種候あゝく
あり中此く源教公尾州へ此降なきは此若の
言ふ此此言ふなくも如何とふまかり此登

城なきれよ之は世度ハ何としく
正身なきれハ源教公信之ハ
外の指ハ取らり中一河他界
世る小中ハカ

権現祿涉骨折らる天下に
中すへくと存ハ好りハ
少く

大猷公涉機始ハかり
同云

一 寛永十二年四月十日公足利の學校より
支直公の像を拜し給ひとき子路の像を
涉覽して作らるるハ
関子塞なるんを
問せ給ひけし
後學校も七
今公の明識は
とかけると
女時
敬公実録

一寛永十二年肥前嶋原一揆のとき之を前より
上使として板倉内膳正石谷十藏を遣され
けしとも老く敷詰よりけしと其後松平
伊豆守戸田左門を以て遣されしとき老
中を上使少く重て伊豆守左門を取詰よ
遣されしと思ふも此の承りぬ格よと内
くよ老より中より之を教公直答よ其に他
之に無事仕合よ承りぬ早に承りぬの如く仕
合

ら遣はしぬ角所存ぬと何をう中より其思
合き候宜く申ら遣はしぬ格よと格よと
直老中重く思召を承りぬ格よと上意の
より承りぬ是れ思召を格よと遣はしぬと
教公仰よ思召の如くの人換り申す候と格よ
ら遣はしぬと直答格よと格よと直老中
後教公仰よ申す候と格よと直老中
人合付候に申す候と格よと格よと格よと

の先人の如くありし世何年之十九松井南水著
松井徳編

一 寛永十九年二月九日

嚴有公のいままは若君二歳にて入りせらるし

初て山王乃社一由來詣るとき由之家換は佐

奉あるべき旨よ言ありし酒井濱は吉忠松平

伊豆吉信も中よけさく教ふの由よ吉よま

大申納ふの人々官の人の位をせし例ありし

ありしとき濱は吉也

當公方様の若君様の御儀よりて外くの無

官の者とも格別の由事よゆと中よけさく公ま

よ作らるし父を右々ありし我等の人も

大相國の御子ありとせさるし濱は吉等御は

よ事よゆし江戶の地は

公方様の由膝下の儀よりし其位は立ま

中よけさく公作らるし山行幸のときも是利義

満権威よ誇りし御子義嗣を関白の座と

よき世に後世まことの識りを残せし今まけて
台命小後つゝ又後世少くも是に識らんかく
台命は後いなきらるい

公方様の是勝下をかりと是答ありけれは讀彼
書等も一云の是答よ及なきりけり其後是の家極
小先達て山王の社にいせられ

若君様を是外添はるべき名の台命小
改り一とく是は縁糸の始なり其時永年四

十三 叙公實録

一 正保元年八月本曾路は通のとき神流川は水
一けさるは廻り道はさき後本村にいせられ
ては止宿ありしよ此所も水かさ言りけれは
叙公小もならうす小戸板を發其とよは産出ひ
て所くの井戸をかこせぬと仰けらる其通め
取計ひけるよありて井戸路一の山くまこ
湯せし事もならり一は心付の子き事ん

人の及ぶ事有らざる人への感一なり一と云
いとまき法年四十又 松井甫水先書
替筆編

一 源教抄抄りて浴のときふ今天下よ之遊女の名
あましく清浄あふんとして清浄のたま吉野を
百まゆまゆりゆく法壇小法座なまれ一とき
吉野は茶を摘み奉りて茶碗を
清取あげ成さしとて吉野は清くともい
ては茶碗をくくせし一吉野は次一退

ま一源少く法例の者ま一さし一傾城も小
氣ある者うふと清い念あり一法威徳のそ
け一きこしと是少く茶を一元来法欲と思
る事なきか一世々く合氣を法をふれ地位
ゆやすしれ吉野もふま一事清浄を嗜み
軍術を業とするも此かともく世境界を
得んま一

は説小く大ひは徳北多半もあらぬと云

正座格別之儀は正座の得るいふ事は正興少く
 正座山成さるべくは然らざる事は正興の正座は正興
 正座を改め申儀は右の通り目付の事の中
 たるもの正興の正興の事の中を改め申儀は正興
 正興の正興の旨扶授仕儀は正興の中
 正興の人へ差景ありて事終る事正興は年
 六十
 尾廣教公事蹟
 松井浦水光書

一 源教所抄前少く昔の事にも正興ありし
 渡邊重房の事味方原少く味方さるる事
 武田方勝は多かりけり事大なる事
 月々えりとき

権現様ちつともさる事正興の事
 たる事あきとんや款をかり勝は多かりけり
 事や言ふ事味方有る事味方の有る事
 ぬは正興の事味方有る事味方の有る事
 まうし柏子小正興ありし事正興の事

まては引取ありしと申すも終るは源教
直氣をかりしと申すも用と申し意あり
不首尾小進加さしと申すも一人
先刻の世に軍術の至極大事と云ふ
思ひ外に力と思ふ事ハ以後とも
意く小しは先刻外の者も居る
事より其方より合ぬ事と云ふ
其外の者より末尾小寺尾土作
直教の居る

一 直教の幼少より出立し
殉死せし程の
者あり小如武軍術ハ直教
大切なる兵ハ祇
なるを要すしと申す
事ハ作
直教の
一 直教の幼少より出立し
殉死せし程の
者あり小如武軍術ハ直教
大切なる兵ハ祇
なるを要すしと申す
事ハ作
直教の

と直報ありしより長久多れ合戦し池田勝入
我武能父子勢ひ極小のときも岩崎の城を
攻落し丹羽勅助一族盡く討死とやして
味方の勝を告げしとき今日の軍山も負ふ事と
作らざし味方の討死をハ勝なりと歎ひ味方
の勝軍をハ負なりとなけしを極ふしきハ
なる事に出武忠蒙の我等も合兵の事あり
さう半と申すはさハ公智く直思案ありて大因

の宣ひも理りしかし我東山の鹿嶋とする
は其前外の山を狩り多く鹿をとめし東
山を狩り多く首尾調ひたる事ハ一是ハ
いふ事なる道平をうかひしを山のふかき
志しし狩りし約束の通り首尾しと前後
調ふしあましく濃き霧ハ味方あましく約束
所し討死しけり勝ありと悦ばし池田
我ハ當日の大切あり長久多とさるる約束

なまぬ岩塚を攻りかへ一旦大利を得るべし
とも士卒勞も長久年の用も之かきと思ひ
まがふまがひの原なるに宣ひしをかんし
ありけしと油濁つる感へ入るべき
尾崎義経

一 源教成或時瑞統院様へは名あり侍る
形ははい女けしとも心を遣ふ事かかへ心
を能遣ひ給へ我命の用も立かへし
一 生るもの小命を惜まぬ者なく七條万室

小も命かきぬ命をくまらぬ人かきんく仁
毫をかへし假小も非道ある事なく不仁ある
事をおす事なく人を志とてかりて用
も立なき者なく取まらぬ行金銀を惜ま
りて追も能くけしをけしとまらぬ者かき
小なき一今候よま人の英雄うほしきと思ふ
ても万石万石を以て侍らまぬや金銀米珍
ハ清物かきし可き命をくまらぬ者小も惜ま

あふんや勝る人の子の軍勢より千人の命を
くまらぬと思ひ付て矢より射る者いたるを
くまらぬと云ふありしに昔也

一 戦場よをいづく人多く討まはるる軍の方よは
勝軍の方よと討まはるる軍の方よは
敵よと向ひては勝つ勝てて歸するも又身
死すも思ふむらに負まふ事も必死するも
事と急ぐも諸軍小合点も急ぐ事

のうし折く作らるるなり
松平水書
替使編

藩鑑卷之二目錄

尾張殿

權大納言源義直卿